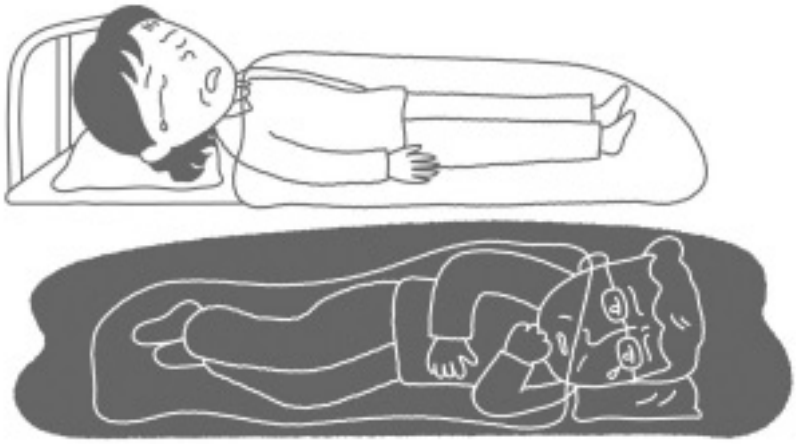
妻を在宅でカイゴして（第２回）

15年にわたり妻を介護している北海道・野瀬義昭さんの介護体験。家に帰っての在宅介護は、昼夜を問わない日々のはじまりでした。（全６回）



イラスト・井上ひいろ

家に帰ってきて嬉しそうな和子から目を離し、大きく一息ついた。間をおかず「今後どうなっていくのだろうか」と、不安が入道雲のように脳裏にわきたってきた。

考えるいとまもなくつくった夕食が何であり、どのようにして食べさせたのか、無我夢中だったので一五年たった今では思い出せない。

声を押し殺して泣いた夜

あわただしい一日を終えて、ベッドに横たわる和子に「おやすみ」と声をかけたが、ことばを失っている和子は何も答えずじっと見つめるだけ。やがて和子の目からわきでた涙が、すっと一筋の涙線となって頬をつたい、流れはじめた。「片言でもいい、ことばがほしい」――会話を失った夫婦の、はかなさと悲しさに耐えきれず、私はあふれる涙を押しとどめることができなかった。たまらず電灯を消し、布団を頭からかぶり声を押し殺して、さめざめと泣いた。

この在宅最初の夜の情景は、今も鮮明に覚えている。生涯忘れることはできないだろう。

いつしか和子は寝ついたらしく、安心しきったような、かすかな寝息が聞こえた。私はなかなか寝つけなかったが、そのうち深い眠りに入っていった。とても長い一日であった。

最初の寝返り介助

「あーあー、うーうー」。深い眠りが異様な声で起こされた。

「なんだろう」と息をひそめて耳をそばだてた。どうやら和子が何かを訴えているうめき声だ。ベッドの横に床を敷いて寝ていた私は、ばね仕掛けのように跳ね起きて「どうした」と声をかけた。和子は大きく目を見開いてぎょろつかせ、何かを訴えている様子だが、ことばを失っているので要領を得ない。困り果てて、時計を見た。深夜の一時だ。しばらく様子をうかがう。体をよじるような仕草をしているので、とっさの判断で体の向きを変えてやると落ち着いた。

これが、最初の寝返り介助だった。

昼夜を問わない介護の現実

和子は全身麻痺の状態、体はぐたっとしてベッドに横たわっている。私は体位交換の要領もわからず、とんでもない苦労をした。

そして三時ごろ、さらに明け方にもう一度「あーあー、うーうー」の声で起こされる。在宅介護初日から完全に寝不足になった。睡魔に襲われ、私はいつでもどこでもごろんと横たわり仮眠をとる。昼夜を問わず二時間ごとの排尿排便の処理、体位交換。

命をけずり、地獄をはいずりまわるような、在宅の寝たきり介護でのもっとも過酷な営みは、延々十数年の歳月を歩み続ける。

（つづく）

ほっと介護 109